
アラベスクの夜に

剣崎薰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アラベスクの夜に

【Zコード】

N67200

【作者名】

剣崎薰

【あらすじ】

俺の名は『鏡也』。

友達の『小雪』に『裕太』に『友紀』。

この四人で始まるちょっと違う学園ストーリー

靈感が強い『鏡也』

運動神経抜群の『裕太』

勉強なら何かと強い『小雪』

謎だらけの『友紀』

……地味に恋愛が入るかも
そのあとどこからか現れる、転校生達
その転校生達は『友紀』の知り合いらしい
しかも転校生の出現で更にややこしくなる学園ストーリー
いつたいどうなるのやら

第一話（前書き）

モバゲーから「ひむか」を始めたおもした剣崎薫です。

初心者ですので、誤字脱字、漢字間違いがあると思いますが、暖かい目で見守ってください

あと、アドバイスなどがありましたらコメントよろしくお願いします。

第一話

? 「…………ふあ～あ
? 2 「おはよう。つてでつかい欠伸…」
? 「しゃあないだろ、夜遅くまで勉強してたんだから
? 2 「はあ～…これだから鏡也は…」
鏡也「う、うるさい、小雪は終わったのか?」
小雪「課題でしょ? 余裕、余裕」
小雪「つてか、やつてないアンタが悪い!」
鏡也「はいはい…」

俺の名は『鏡也』(きょうわ)。
ある大学に通つてる、?大学生。ただ、唯一違つのが靈感がある」と…
隣にいてさつきからひるむわいのが、『小雪』(こゆき)。俺と同じ
大学に通つてる幼なじみ。
小雪も靈感がある。
それでいて成績が優秀。
どんな頭してゐるのか知りたいぐらうだ。
いつも、俺の課題を手伝つてくれるのは嬉しいんだけど、世話を焼す
ぎかな…

小雪「なんか言つた?」
…おまけに勘が鋭いし
鏡也「なんも言つてないよ…」
小雪「嘘でしょ?」
鏡也「…」

…女つて怖いな
…うこう瞬間つてやだな…
…うこうときに限つてＫＹなやつが…

? 「よつーまた一人で登校か？」

来たよ…

? 2 「……」

? 「友紀もなにか話せよ…」

つてか友紀も居たのか…

友紀「……おはよう」

? 「あのな～…、もう少し喋ろうぜ？」

友紀「……本を読んでるから無理、裕太」

裕太「だからってな～」

鏡也「……」

小雪「……」

こ、こいつらにはついていけん…

裕太「お、悪いな、スルーして」

鏡也「…それはいつもだろ？」

裕太「なんだよ、つまんないな～」

…俺の何を求めてるんだ

裕太「そりや、反応だよ」

鏡也「……」

小雪「おはよ、友紀」

友紀「……うん、おはよつ」このマシンガントークの男子はこれまで幼なじみの『裕太』（ゆうた）、そして隣でくつついて本を読んでるのは『友紀』（ゆき）。

なんでこの二人が一緒にいるのかはわからないけど、裕太から聞くには幼なじみらしい…

鏡也「…なんでお前ら仲が良いんだ？」

裕太「前に話さなかつたか？」

鏡也「忘れた」

小雪「ほんつと忘れっぽいね」

友紀「……ノイローゼ」

鏡也「違うつー！ただ、忘れっぽいだけだ！」

裕太「それをノイローゼって言つんだよ……」

鏡也「……」

：「一つ訂正。友紀は大人しいけど腹黒い……

というより、毒舌なのかな……

鏡也「つてか時間は大丈夫？」

小雪「うーん、あつ！結構ぎりぎりかも」

裕太「やべっ！急がないと担任がうるせえぞー！」

鏡也「お、おう」

俺達の担任、名は『菊哉』（きくわ）。

普段は温厚だけど、こざとなると凄い怖い

小雪「ほら、友紀も早くー！」

友紀「……（コクン）」

だつだつだつ……

こうして始まる俺の学校生活

ただ、この時まではあんな事に巻き込まれるとは思つてもみなかつた：

第一話

（授業中）

小雪「……」

裕太「……」

友紀「……」

鏡也「……？」

小雪（よぐ、寝れるね）
（まつたくだ）

友紀（このままにじておいいせいせいか）
（まつたくだ）

裕太「起こす？」

小雪（え、でも……）

裕太（まつたく、鏡也の事になると必死だな）

小雪（そ、そんなんじやないから）

菊哉「こら～！そこしゃべらない！」

小雪「は、はい」

裕太「す、すみません」

友紀「……（鏡也に指を指す）」

菊哉「寝かせとけ、後で課題を出させる

友紀「……（コクン）」

（授業終了後）

鏡也「うーん、よく寝た～！ってなんじやこつや～」

友紀「……課題」

裕太「課題をやつて提出だとさ」

鏡也「うへ～」

小雪「はあ～、後で持つてきな。手伝つてあげるから……」

鏡也「サンキュー、小雪」

友紀「……（ジーツ）」

鏡也「ん？友紀も来るか？」

友紀「……（ゴクン）」

小雪（ねえ、裕太？友紀つて何故か鏡也に懷いてるよね？）

裕太（そななんだよな…、不思議なんだけど理由聞いても俺にすら

教えてくれないんだよ）

小雪（友紀にも恋愛感情があるのかな？）

裕太（どうなんだろ？）

友紀「……（ガシツ）」

鏡也「え？」

裕太&小雪「！…」

小雪「ちょっと、ちょっとなにやつてるのー！」

裕太「……」

ゆ、友紀が俺の腕を組んでいる…

男子としては嬉しいんだけど、いきなりすぎでびっくりする

鏡也「ど、どうしたの？」

友紀「……」

だ、だんまりですか…

（放課後）

鏡也「あの～友紀さん？」

友紀「……？」

鏡也「いつまで俺の腕にしがみついてるの？」

友紀「……帰るまで」

…放課後だよ、今

つて言おうとしたら

友紀「……家に」

鏡也「へ？」

あんま考えたくないけど

鏡也「それって、家まで送れって事?」

友紀「……（コクン）」

小雪「たまには良いんじゃない？ねえ？はいはい 裕太」

裕太「お、おう」

小雪（今日ちょっと付き合つてね）

裕太

小雪「じゃあ、私達は用事があるから」

鏡也「え？お、おう。また明日な」

第三話／小雪観点

大学を出て、二人は校門の裏に回った

：裕太を引きずりながら

裕太「いたた、引きずるなよ！」

小雪「……」

裕太「おい！聞いてるの……」

小雪「しつ。静かにして」

裕太「なんなんだよ、まったく」

文句を言いつつも静かにするのね、裕太は
あっ、来た

な、なによう、二人で仲良くあるいて…
こうなつたら意地でも着いて行つてやる！

裕太「小雪！」

小雪「へ？な、何？」

裕太「何？じゃねえよ！いくら呼んでも返事が無いから心配したり
やねえか！」

小雪「ご、ごめん。ちょっと考え方してて…」

裕太「……もしかして友紀のことか？」

小雪「え？」

裕太「なんかさつきからおかしいぞ？」

小雪「そ、そうかな？」

……どうせ、私の気持ちなんか

裕太「やきもち？」

小雪「……つ！」

ガンッ！

裕太「いつて…なにも殴ることはないだろ？」

小雪「あ。ご、ごめん」

つ、つい反射で殴ってしまった…

裕太「そういえば、俺と友紀があつた話はしてなかつたよな？」

小雪「え？う、うん」

裕太「いい機会だ、話してやるよ」

（裕太の過去）

裕太「たしか、あの日は小学生の時だったかな…」

あの時の俺は、俗に『がき大将』だった

まあ、周りから呼ばれてただけで俺に実感は無かつたが。

運動神経抜群つていうだけで、まわりに男子が集まってきた
俺はうざくなつて、最初は解散させたが、結局ついてきやがる…

俺は呆れて「勝手にしろ」と言つた

小学五年の時には中学一年生並の外見になつていた

ある日、普通に一人で下校していたら、後ろから殴られた
ただ、頑丈だつたためなんとか気絶はしなかつたが、周りを見てみ
たら、前に俺の下に付いてた奴らだつた

A「ちつ、やっぱり硬いか

B「だから無理だつて言つたでしちゃうが！」

裕太「て、てめえら」

A「口の割にはフランフランじゃねえか！」

裕太「ぐつ…」

約十人に一方的に殴られて、俺の意識が無くなりかけたその時
ガニッ

A「ぐわつ」

B「おい！どうした」

C「ぎやあ～」

B「お、お前は…」

ゆつくりと目を開けて見ると、本を読みながら、Aの頭を踏ん付け
てる女の子が立つていた

因みにCは一？ぐらいふつとんでた

裕太「 ゆ、 友紀…」

友紀「 ……何やつてるの?」

B「 ひ、 ひ…」

D「 に、 逃げる…」

E「 友紀には構うな、 とりあえず逃げる…」

俺を襲つていた約十人は一目散に逃げて行つた
AとCを引きずりながら…

裕太「 す、 すげ…」

友紀「 ……大丈夫?」

裕太「 オ、 オウ。 サンキュー…」

友紀「 ……だらしない」

裕太「 うるせ…」

友紀「 ……保健室に連れてく、 一人で立てる?」

裕太「 よ、 余裕…つ!」

ドサツ…

スッ…

裕太「 あ、 ありがとう」

友紀「 ……」

裕太「 つてな訳だ」

小雪「 案外裕太つて喧嘩弱いのね」

裕太「 う、 うるせ…」

小雪「 つてアンタのせいで鏡也達見失つたじゃないの!」
バシッ…

裕太「 いつてえ…、 俺のせいいかよ!」

小雪「 当たり前じやない!」

… でも

小雪「裕太も苦労してたんだ…」

裕太「ん?なんか言つたか?」

小雪「う、ううん。なんでもない」

裕太「…?」

（暫しの沈黙）

裕太「そうだ!こんどは小雪と鏡也が会つた話ししてよ」

小雪「へ?そ、そんな大した話しじゃ無いし、つまらないから

裕太「いいから、いいから」

小雪「……わかつたわ」

小雪「たしか、私も小学生の頃に鏡也に会つたんだよね」

～小雪と鏡也の再会～

あの日、確かに小学校上がるときには鏡也と別れてしまったの

理由が、鏡也側の父親の急な転勤

鏡也は転勤先の小学校に入ることになった

だから、もう会つことはないだろ？と思つてた…

その五年後、小学校六年生の時、一人転校生が来るって噂があつたの
だけど、私は運悪く体調を崩して家で寝込んでいた…

寝込んでから、一週間後、久々に学校に行つたら授業の体育中、急
に意識が無くなつたの…

次に目が覚めたときは、見慣れない男の子と私の母親が楽しげに喋
つてた…

小雪「……」

母「そうなの～、大変ね～」

? 「いえいえ

母「それにしても、ホント人々ね～」

? 「しょうがないですよ、父さんが転勤に選ばれてしまつたんですね
から」

母「今家はどこなの？」

? 「あの家に住んでます

母「そうなの～、両親は？」

? 「……母しかいません」

母「え？」

? 「父親と離婚したんです」

母「そうなの…、「」めんなさいね、変なこと聞いちゃって」

? 「いえいえ。あつ、小雪が起きたみたいですよ」

母「え？」

小雪「へ？」

突然話しを振られて困惑する小雪

? 「小雪、もう動いて大丈夫なのか？」

小雪「なんで私の名前を？」

? 「あ、五年も経っちゃったから忘れちゃったか…」

母「な」に? 忘れちゃったの？」

小雪「え?え?」

? 「おばさん、自分からいいます」

母「あ、じゃあお願ひね。これから仕事行かなきや。じゃあ小雪を
よろしくね」

? 「はい」

ガラガラ…ピシャリ

? 「わてど、忘れてるのはひどくない? 小雪」

小雪「え、でも私、君みたいな人は知らないよ」

? 「はあ…。やっぱ名前言わないとダメか…」

小雪「?」

? 「俺の名は鏡也って言えばわかるよな?」

小雪「!…」

え、ホントに鏡也なの?
じゃあ、もしかして…

小雪「この学校に来た転校生って…」

鏡也「そ。俺」

小雪「え? ジヤあ保健室に連れてきたのも?」

鏡也「それも俺。つてか軽くなつた? 何食べてたんだよ」

小雪「病み上がりだからしょうがないじゃない!」

鏡也「はあ~..。お前は無理するんだからもう少し気をつけようよ~。」

小雪「う、うん」

鏡也「あ~!」

小雪「な、なによ急に」

鏡也「宿題やるの忘れてた!」

小雪「人の事心配するより自分の事をやれ!」

バシツ:

鏡也「いってえ!」

小雪「つて感じ?」

裕太「..あんまり変わつて無いのな」

小雪「まあね..」

裕太「.....」

小雪「今日はここまで。ありがとね、話し聞いてくれて。また明日

」

裕太「おひ、また明日な~」

（鏡也と友紀視点）

（帰り道）

鏡也「……」

友紀「……」

わ、話題が思いつかない

つてがあんまり喋った事無いし、どうしよ…

友紀「……鏡也」

鏡也「ん？」

友紀「……鏡也って、靈感ある？」

鏡也「急にどうした？」

友紀「……何故か同じ感じがする」

鏡也「それってもしかして、友紀にも？」

友紀「……（コクン）」

どうやら、友紀にも靈感があるようだ

意外に靈感ある人つて見つからないんだけどね

唯一いたのが小雪だけで、まさか身辺にまた一人いるなんてね…

友紀「……私は靈能者の家系だから」

鏡也「え？」

まさか、俺のことと同じ能力の家系か？

友紀「……確かに、小田家から別れた能力って聞いた。その中でも私は強い力の持ち主らしいけど…」

鏡也「小田家？どこかで聞いたような…」

うーん、なんだっけな～

あつ！思い出した

鏡也「つて小田家つてうちの家系だよ？」

友紀「……やつぱり」

鏡也「やつぱりとは？」

友紀「……今まで見てきた靈能者の類より力がある感じがしてた」

鏡也「……」

友紀「……？」

鏡也「何かが前方にいる……」

友紀「……（ゴクン）」

鏡也「見えるのか？」

友紀「……少しだけ」

鏡也「たぶん、地縛霊だ。でも成仏はできない」

友紀「……なぜ？」

鏡也「それが小田家の庭だから」

友紀「……じゃあ、違う道にしよう」

鏡也「うん、とりあえずはね」

友紀「……あ、でもこの道しか道がない」

鏡也「つたく、厄介な地縛霊だ」

しょうがない……。札を使うしかないか……

スツ……

友紀「……なにそれ？」

鏡也「地縛霊用のお札。能力を使わないからこれなら大丈夫」

シユツ……

地縛霊「ぎやあ～」

地縛霊が消えると同時に目の前が白い光りに包まれた

友紀「……」

鏡也「相変わらず、眩しいな」

だんだんと目が慣れてきたら、そこには友紀の家の目の前だった

友紀「……ここ」指を指す

鏡也「なんだって地縛霊が邪魔してたんだよ」

友紀「……まあ？」

鏡也「まあ？って……」

友紀「……ここまででいい」

鏡也「そうか？」

黙つて友紀が俺から離れる

鏡也「また明日な～」

友紀「……（コクン）」

（鏡也の帰り道）

鏡也「しつかしなんて地縛霊がいたんだ？」

最近減ってきてたのに、なぜ今更またでてきた

鏡也「小田家か…。一度調べてみる必要がありそうだ」

自分の家系を調べるのはあんまり乗り気じゃないんだけどな

第一、なんで靈に能力を使っちゃダメなんだろう…

それも、物心付いた時から言われてたし

その辺は調べなきやな…

第四話

「次の日」

「ひひひっ」

鏡也「ふあ～あ

もう、朝か

結局、母親に聞いても教えてくれなかつたし、自分で調べようにも

小田家は遠いし…

鏡也「顔でも洗うか…」

ジャーツ…顔を洗浄中

鏡也「ん～。さてと、朝～はんでも食べるか

リビングに着いたら…

母親「あら、おはよ～？」

友紀「…」

鏡也「うん、おはよ～なんで友紀がいるの？」

友紀「…たまたま」

鏡也「いや、たまたまじゃないだろ、それ」

母親「びっくりしたわよ、ドアを開けたら田の前に座つて待つてる
んですけど。聞いてみたらあなたを待つてるって言つてたから、寒
いし入れてあげてたの」

…だからつてね～

母親「ほ～ら、早く準備しなさい！時間がないわよ～」

鏡也「ぶつ～げほげほ…は、早く言つてよ～」

友紀「…（クス）」

鏡也「…」

い、今笑つた？

鏡也「つてそんな場合じゃない、早く着替えなきゃ」

（鏡也着替え中）

鏡也「よし、行つてきま～す」

友紀「……（コクン）」

鏡也「いや、友紀も来るの！」

友紀「……スツ…」

鏡也「よし行くか」

友紀「……うん」

母親「行つてらつしゃ～い」

（鏡也 & amp; 友紀登校道）

鏡也「ん~、時間的には走らなくとも大丈夫そう」

友紀「……そう」

鏡也「そういうえばなんで今日俺の家に？」

友紀「……これ」

鏡也「ん？」

渡されたのは古い書物

題名は『靈界』

中を開こうとしたら、友紀が止めた

友紀「……まだダメ。……全員揃つたら開いて」

鏡也「わ、わかった」

? 「お~い鏡也（友紀）」

ん? ）の声は…

鏡也「裕太?」

裕太「よう。やつぱりお前らだったか。つてか珍しい組み合わせだな」

鏡也「朝起きたら友紀が家の中にいた」

裕太「は? ホントか友紀?」

友紀「……（コクン）」

鏡也「なんでだと思う?」

裕太「知らない。ただ、これだけは言える。友紀はお前の何かに気

に入ったんだと思われる。まあ、簡単に言つと懐かれたつてどこかな？」

鏡也「なぜ？」

裕太「知るか！友紀に聞け」

鏡也「聞いても答えてくれない」

裕太「そういえば、小雪は？」

鏡也「あれ？見てないな…」

友紀「…」

裕太「ん~、まあ先にいるだろ」

友紀（……靈現象に巻き込まれた形跡がある）

鏡也（靈現象？）

友紀（靈がたまに生きてる人間を靈界まで連れ込む時がある…）

鏡也（そういえば、小雪も少しだけ靈感があるみたい）

友紀（……放課後空いてる？）

鏡也（空いてるけど）

友紀（…ちょっと家に来て）

友紀（……助けに行く）

鏡也

裕太「なにやつてんだよーーはやくしろーー！」

鏡也「お、おう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6720o/>

アラベスクの夜に

2010年11月8日17時29分発行